

大義と絆・ガネフォ参加

ガネフォ選手団 団長

頭 山 立 國

(慶応義塾大学出身)

1963年11月、インドネシア国営ガルーダ航空のジェット機が、ガネフォ日本選手団・役員総勢96名を載せて、羽田空港を離陸し、その数時間後ジャカルタ空港に降り立ちました。

そして、選手村に向かう送迎バスに乗ってびっくりしたのです。

それは、沿道を埋め尽くしたインドネシア国民の大声援でした。

バス走行中、道路の人垣は途切れることなく「ジャポン・ジャポン」の大声援で迎えられました。私は「本当に来てよかった。ガネフォに参加して本当に良かった。」との思いでした。

戦中・戦後と日本はインドネシア国民と共に戦い、戦後日本の残留将兵は、オランダ軍との独立戦争を戦い、半数の日本の将兵が帰らぬ御霊となった事をインドネシア国民は憶えており、またスカルノ大統領は、困難な壁を乗り越えて、ガネフォに参加した日本への最大の感謝の気持ちを拳国一致で表してくれたのです。

当時24歳の私に参加依頼の要請が、なぜあったのか？

その経緯について少しだけ触れておきたいと思います。

私の兄の統一（モトカズ）が、学内に「東南アジア学友会」と言う文化学生団体を起ち上げたのですが、1958年（昭和33年）兄の卒業を機に私が引き継ぐことになりました。

そして、翌年の1959年にアジア・アフリカに滞在している インドネシアの留学生の代表者（日本を含む）会議があり、終了後留学生の希望で約50名を京浜・関西・北九州の工業地帯に案内することが出来ました。この時慶應義塾大学OBで北海道炭鉱汽船 社長萩原吉太郎様等から多額のご援助を頂き感謝しております。

するとその翌年に、インドネシア学生会議から私達がインドネシア訪問の招待を受ける事になったのです。そのような経緯から相互信頼が生まれ、大使を始め大使館員との相互信頼が培われました。

1963年インドネシアとの関係が深い人達が、大使館からの連絡で出向きました。この席でガネフォ開催の趣旨説明と選手派遣の要請を受け、その結果大会参加の母体が確定したのです。選手団結成と選手選考には体育系関係との繋がりを考慮され、最も年齢の若かった私が適任と判断され団長の任をお受けする事になりました。

インドネシアは日本にとって切っても切れない友好国であります。当時IOCを脱退しており、翌年に迫った東京オリンピックとの両立が譲れぬ条件でありました。そのような事からJOCからの協力が得られないのは承知しておりましたが、陸連・水連は特に厳しいものでした。従って水球選手の皆様は、大会参加の「大義」を心から理解され、日本水泳連盟からの脱退と言う重大な決意をされ馳せ参じて頂きました。

皆さんとの縁が結ばれたのは、体育会会員であり中学からの友人である原大輔君が、井形敦君に相談してくれた事から始まったのです。内容を理解した井形君が山本健先輩に事案の内容を説明して、山本氏もその参加の意義を正しく理解・賛同されご協力頂いたのが、菅久、村上（旧姓：本郷）両氏を始めとする水球選手の皆さんとの60年に亘るご縁の始まりでありました。

多くの方々の協力でガネフォに参加できたことは、両国の親善・友好・信頼に大きな意義があり、その結果インドネシアは、東京五輪への参加意思を固め日本へ選手団を送ったのですが、国際陸連・水連がガネフォ出場選手の五輪参加を認めず、インドネシアは残念ながら参加を辞退し、帰国する事になりました。その時ガネフォに参加した有志が羽田空港まで見送りに行きました。これは両国にとって非常に残念な事でありました。その後、「ガネフォ」そのものは消滅しましたが、参加の大義と精神は連綿と息づいています。

インドネシアとの友好関係がこれまで継続されてきたことは、日本選手のガネフォを通じての友好が両国間の信頼の絆を一層深めた事を誇りとして抱き続けて頂きたい。

水球選手の方々が、年に一度の懇親会を開催され、今までに50周年・55周年の記念誌を発刊され、この度60周年記念誌を発刊される事は、選手団を率いた身としてこの上ない喜びであります。

